編集委員会報告

編集担当理事 面出 和子 Kazuko MENDE

編集委員 椎名 久美子 Kumiko SHIINA

2007年から2016年までの10年間の編集委員会の活動について、『図学研究』を中心にまとめる。

表1に、この10年間の編集委員長を示す。編集委員

表1 編集委員長と担当巻号

	担当巻号（通巻）	刊行年
倉田 和夫	第41巻1号（通巻115号）	2007
面出 和子	第41巻2号（通巻116号）～ 第43巻1号（通巻123号）	2007～2009
長島 忍	第43巻2号（通巻124号）～ 第45巻2号（通巻132号）	2009～2011
面出 和子	第45巻3号（通巻133号）～ 第49巻1号（通巻145号）	2011～2015
今間 俊博	第49巻2号（通巻146号）～ 第50巻4号（通巻150号）	2015～2016
齋藤 綾	第51巻1号（通巻151号）～	2017～

表2 『図学研究』の刊行状況

刊行年	巻	号	通巻	研究論文	作品紹介	そ の 他	刊行年	巻	号	通巻	研究論文	作品紹介	そ の 他
2007	41	1	115	1			2012	46	1	135	3		
		2	116	1					2	136	1	1	教育資料1・講座
		3	117	3	1				3	137	1		講座
		4	118	2	1				4	138	1		講座
2008	42	1	119	2	4		2013	47	1	139	2	1	講座
		2	120	1	1				2・3	140	3	3	講座
		3	121	2	1	図学ノート1			4	141	2		講座
		4	122	1	1	講座	2014	48	1	142	1	3	
2009	43	1	123	2	1	講座・報告			2・3	143	1	2	研究資料1・講座
		2	124	3		講座			4	144	1	1	研究資料1・講座
		3	125	2			2015	49	1	145	2		講座
		4	126	3	1				2	146	2		講座
2010	44	1	127	2	2	研究資料1・講座			3	147	2		
		2	128	1	1	研究速報1			4	148	1		
		3	129	2	2		2016	50	1・2	149	1	1	
		4	130						3	150	1		教育資料1
2011	45	1	131		2	研究速報1			4	151	1	1	
		2	132	3	1								
		3	133	1	1	教育資料1							
		4	134	3									

長は、第45巻2号まではおおむね2年ごとに交代してきたが、第45巻3号から第49巻1号までの4年近くの間、再び面出和子が編集委員長を務めた。第49巻2号から今間俊博氏に交代した後、今間の本務先の業務過多のため、第51巻1号から齋藤綾氏が編集委員長を務めている。

1. 『図学研究』の刊行状況

表2に、この10年（2007～2016年）の『図学研究』の刊行状況を示す^{注1）}。10年間に第41巻1号（通巻115号）から第50巻4号（通巻151号）まで37号の『図学研究』が刊行された。通常1年に4号の発行であるが、2号を合冊で刊行した年度があったため、40号ではない。第47巻（2013年）は2号と3号、第48巻（2014年）

表3 「講座」のタイトルと著者

巻(号)	通巻	タイトル	著 者
42(4)	122	ひと筆描き試論 ナスカの地上絵	小山 清男
43(1)	123	ひと筆描き試論 影絵のひと筆描き	小山 清男
43(2)	124	ひと筆描き試論 オイラーの線形グラフ	小山 清男
46(2)	136	図学と折り紙(1)	三谷 純
46(3)	137	図学と折り紙(2)	三谷 純
46(4)	138	図学と折り紙(3)	三谷 純
47(1)	139	図学と折り紙(4)	三谷 純
47(2・3)	140	図学と折り紙(5)	三谷 純
47(4)	141	図学と折り紙(6)	三谷 純
48(2・3)	143	機械にまつわる幾何学形状(1)	園田 計二・ 竹之内 和樹
48(4)	144	機械にまつわる幾何学形状(2)	園田 計二・ 竹之内 和樹
49(1)	145	機械にまつわる幾何学形状(3)	園田 計二・ 竹之内 和樹
49(2)	146	機械にまつわる幾何学形状(4)	竹之内 和樹・ 園田 計二

は2号と3号、第50巻(2016年)は1号と2号が合冊になった。これは、掲載論文の数が少なかったためである。

10年間に『図学研究』に掲載された研究論文は61件、作品紹介は33件である。2004年の第38巻2号(通巻104号)から新設された作品紹介はここ10年間で定着した感があるものの、研究論文の掲載件数は多いとは言えない。論文投稿の活性化の必要性については、かなり前から編集委員会が課題としている問題である。編集委員会では、投稿の意欲を高めるためには査読が短期間で円滑に進むことが必要と考え、投稿および査読の電子化に取り組んだ(3節で詳述)。

少ない論文数に苦しむ中、誌面の充実をはかる目的で掲載されたのが、特定のテーマをとりあげた「講座」の連載である。表3に、第42巻4号～第43巻2号、第46巻2号～第47巻4号、第48巻2・3号～第49巻2号に掲載された「講座」のタイトルと著者を示す。

2. 投稿および査読過程の電子化

論文の投稿数が伸び悩んでいる原因のひとつとして、査読期間が長いことが考えられた。2011年の時点では、論文の投稿、査読者への査読依頼、査読者からの査読結果の返送、著者への判定結果通知、著者からの改稿の送付などの査読過程は、編集委員が集まって議論しながらの作業で、すべて郵送によって行われていた。

そこで、投稿を電子的に受け付けて、各論文の担当者が査読者や著者との連絡をするよう変更することで、査読過程における査読者や著者との連絡日数の短縮化をはかることが検討された。査読期間が短縮されることで著者の投稿への意欲が高まり、投稿数の増加に繋がると期待された。また、作業を電子的に行えるようにすることで、集まっていた編集作業の負荷を分散したいという意図もあった。

2011年頃から、投稿および査読過程を電子化するための具体的な検討がはじまり、2012年度の春季大会の総会において、『図学研究』投稿方法の変更(電子化)ならびにそれに伴う投稿規定の改定についての提案が審議され、承認された。2012年5月12日付で『図学研究』の投稿規程が改定され、2012年9月30日付で「執筆要領」も改定された(2014年1月にはさらに改定され、「作品紹介」にも概要をつけることになった)。

そして、2012年10月1日より、図学会のWebページからの電子投稿が開始された。電子投稿システムでは、匿名による査読を行うために、著者情報を含まない状態の論文ファイルを査読者がダウンロードできるようにした。一方、査読過程のとりまとめを行う論文担当者は、査読者や著者とのやりとりに必要な著者情報を入手できるようにした。また、従来、対面での編集委員会によって受け継がれていた査読の進め方や判定方法を文書化して、論文担当者となった編集委員が査読過程を円滑に進められることを目指した。

なお、『図学研究』の電子投稿化と同じタイミングで、大会講演論文集の原稿についてもWebページからの提出に切り替えた。大会講演論文集の原稿については、大会プログラム委員会による書式の確認を経て製本されている。

3. 『図学研究』の電子アーカイブ化

2004年から2005年にかけて、『図学研究』および大会講演論文集のバックナンバーをPDF化する作業(含OCR)が、業者に発注して行われた。これらの作業は、バックナンバー保管スペースの確保という目的もあり、理事会主導で進められた。

2005年に科学技術振興機構(JST)から電子アーカイブ事業参加に関する問合せがあった。これを受けて、正式要請があり次第、公開する方向で、前向きに取り組む方針が理事会において決定された。電子化委員会と編集委員会で、公開に向けて解決すべき問題について検討することになった。しかし、2005年には選定に漏れた。

2009年には、JSTの電子アーカイブ対象選定委員会によって、『図学研究』が「平成21年度電子アーカイブ対象候補誌」に選定され、創刊号以降の全巻全号を電子化してアーカイブされる対象誌となった。

論文等の著作権は、1999年に投稿規定が改定されて、図学会に帰属することが定められた（著作者人格権については著者に帰属）。2002年には、電子化を見据えて、「一切の著作権（日本国著作権法第21条から第28条までに規定するすべての権利を含む.）」という表現に改定された（著作者人格権が著者に帰属するという点については改定なし）。

創刊号以降の全巻全号を電子アーカイブするにあたっては、投稿規定で著作権が学会に帰属する改定がなされる前に掲載された論文等を対象に、2009年12月号の『図学研究』（第43巻4号）の会告および図学会Webにおいて著作権の譲渡のお願いに関する告知を行うと共に、了承いただけない場合の対応についても明記した。また、電子アーカイブ化にあたって、バックナンバーの保管数が少なくなるものについては、会員に寄贈を呼びかけた。

その後、事務局担当理事がJSTの担当者と詳細な詰めを行うと共に、オンラインジャーナル用のISSN番号の登録申請を行って、ISSN番号を取得した。2011年6月の理事会において、『図学研究』の著作権がJ-STAGEに移管されたことが報告され、2011年9月の理事会において、JSTに提供した『図学研究』の電子アーカイブデータの納品が報告された。これらの作業を経て、創刊から2008年（第42巻）までの『図学研究』がJ-STAGEで公開された。これにかかった費用は、JSTの予算から支出された。

2009年以降の『図学研究』については、学会のWebページに電子版を掲載していたが、発行から24ヶ月は会員のための閲覧（認証アクセス）に制限していた。

その後、論文等の記事に対するDOI（Digital Object Identifier）の付与を目的として、2013年にはJSTに対してJ-STAGEのシステム利用申請の申込を行った。その結果、『図学研究』がJ-STAGE掲載の優先誌に選定された。これに伴って、JSTの提案に従って認証アクセス期間を12ヶ月に短縮することが理事会のメーリングリストで審議され、承認された。また、採択された論文等の著者からは、著作権譲渡に関する署名入りの文書を提出してもらうことにすると共に、J-STAGE用にカラー原稿を受け付けることにした（冊子は原則としてモノクロ印刷）。

2013年以降（第47巻以降）の『図学研究』は、各号

表4 論文賞一覧（2007～2016年）

	表彰年	種別	選考対象となる『図学研究』の刊行年
第2回	2007年	研究論文賞	2005, 2006
第3回	2008年	教育論文賞	2006, 2007
第4回	2009年	研究論文賞	2007, 2008
第5回	2010年	教育論文賞	2008, 2009
第6回	2011年	研究論文賞	2009, 2010
第7回	2012年	教育論文賞	2010, 2011
第8回	2013年	研究論文賞	2011, 2012
第9回	2014年	教育論文賞	2012, 2013
第10回	2015年	研究論文賞	2013, 2014
第11回	2016年	教育論文賞	2014, 2015

の発行から12ヶ月以内は電子版が学会のWebページで会員のための閲覧（認証アクセス）となり、それを過ぎると、論文等（論文、作品紹介、講座）がJ-STAGEに掲載されてオープンアクセスとなる。各号の登録手数料は、学会が支出している。掲載された各論文等にはDOIが付与されている。

2009年から2012年までの『図学研究』については、J-STAGEに掲載されてこなかったが、50周年記念事業の一環として、この間の『図学研究』の論文等をJ-STAGEに登載する作業を進めているところである。

4. 論文賞の選考

2005年度に新設された日本図学会論文賞は、2年間の『図学研究』に掲載された記事から研究論文賞と教育論文賞を毎年交互に表彰するものである。選定委員会は、編集委員長が委員長となり、編集理事および編集委員4名で構成される。

表4に、2007年から2016年までの論文賞について、表彰年と種別、選考対象となる『図学研究』の刊行年の範囲を示す。各回で表彰された論文は、この記念号の「授賞記録」の節を参照されたい。

5. 今後の編集委員会について

現在、春季および秋季大会では多くの発表があるにもかかわらず、『図学研究』への投稿論文数は決して多いとは言えない状況である。投稿論文数を増やすための試みとして、各大会のプログラム委員と協力して、春季および秋季大会の講演論文のうち著者が希望したものについてそのまま『図学研究』の査読システムに進ませる試みを始めた。大会講演論文には欧文のタイトルやアブストラクトが無いなど、解決しなければならない問題は

残っているが、できるだけ円滑に査読が進められるよう、改善に努めているところである。

著者も査読者も覆面の状態で査読を行う点についても、議論されている。投稿論文数が増えれば、必然的に、現在より多くの会員に査読を依頼することになる。覆面での査読が質の高い論文の掲載に繋がっていることは確かだが、会員数が決して多いとは言えない本学会の場合、査読を依頼できる会員も少ないという現状がある。また、若手の編集委員が増えていることから、査読者を探すのが難しくなる可能性も出てきている。査読をすることは、自分自身を顧みることにも繋がるものである。査読を依頼された際には、積極的なご協力をお願いしたい。

なお、編集作業は本部に近い委員だけで行うものではない。編集委員のメーリングリストを利用して情報交換ができるシステムもあるので、とりわけ支部所属の委員には、投稿論文の担当、支部の情報（各支部の研究会や会告など）を発信していただきたい。

現在、核となる編集委員が新しい体制になっている。かつて、顔を合わせて編集委員会を開催していた頃には、そこで交わされた情報や議論で学ぶことも多く、楽しかった。多くの作業が電子化された中で、だからこそ直接顔を合わせた議論の中でこそ生まれるアイデアもあるように感じている。かつてのような編集委員会の雰囲気、次の世代に継承できればと思う。

注

- 1) 2014 年度以前の『図学研究』については安藤直見氏のまとめによる。

謝辞：本稿の執筆にあたって、山口泰氏より『図学研究』の J-STAGE 掲載の経緯を中心にご助言いただいたことを感謝いたします。

めんで かずこ

女子美術大学 名誉教授
図学教育研究に従事。著書に『造形の図学』、『遠近法と絵画』、『美の図学』、『図学用語辞典』など。
mende90011@venus.joshibi.jp

しいな くみこ

独立行政法人 大学入試センター研究開発部 教授、博士（学術）
空間認識力の評価、非教科型の能力測定に関する研究に従事。
shiina@rd.dnc.ac.jp